

雨の日

ある夏の夕方のことでした。外を歩いていたら私は、雨粒が落ちてきたことに気が付きました。ぽつ、ぽつ、ぽつ。小さな水滴が顔を伝えます。

私は傘を持っていませんでしたが、これくらいの雨なら大丈夫だろうと、急ぎ足で家へ帰っていました。ところが、すぐに止むだろうと思っていた雨は瞬く間に強くなり、

気づいたときにはバケツをひっくり返したような強さになってしまったのです。もちろん、傘を持っていなかった私はびしょぬれです。

とりあえず、雨が止むまで雨宿りをしないと。そう思って、とあるお店の軒先に駆け込みました。初めは気楽に待っていた私も、弱まることを知らない雨脚にだんだんと不安になってきました。

更に雷まで鳴り始め、心細くなった私は

リュックの肩ひもをぎゅつと握って縮こまっていました。そんな時です。

「お姉ちゃん、だいじょうぶ？」

自分よりもずいぶん低い位置から、なんとも可愛らしい声が聞こえてきたのです。

驚いた私はぱつと振り向きました。

そこには、ぶかぶかの雨合羽を着た小さな女の子が立っていました。

慌てて私はしゃがみました。女の子はにこりと笑って聞きました。

「おねえちゃんは、あめ好き？」いきなり聞かれたのは、あめが好きかどうか。

このイントネーションだと、雨が好きか聞かれたのでしょうか。私は正直に答えました。

「私はあまり好きじゃないなあ」

そう言えば、女の子は少し悲しそうに、そっかあと呟きました。

でもすくぱつと顔を輝かせて、

「わたしはね、あめが好き！」

だって、水たまりはきらきらするし、たくさんあそべるよ！あとね、

おともおもしろいし、かっぱをきると、ママがかわいいねって言ってくれるの！」

女の子は満面の笑みでそう言いました。

「あとね、おねえちゃんと会えた！」

その顔が私には雨上がりの空のように見えました。そうです。

この不思議で素敵な女の子には、この雨がないと出会えなかったのです。

そう気づいた瞬間、私はこの雨が何だかとても素敵なものに思えてきました。

それに気づかせてくれたこの小さな女の子に、私は笑いかけました。

「そっだね。なんだか私も雨が好きになってきちゃった」

すると女の子は、本当に、心の底から嬉しそうに笑ったのです。

「えへへ、やったあ！」

その様子に、さつきまでの憂鬱な気分はもうどこかに行ってしまった。

「あ、おねえちゃん！あめ、やんできた！」

「ほんとだね」

いつの間にか雨は止んで、青い空が顔を覗かせていました。

と、道の向こうに女の子の母親らしき人を見つけた女の子は、

ままだ！と嬉しそうな声を上げました。

それに気づいた母親はこちらに来て女の子を抱えると、

私にお礼を言って帰っていきました。

女の子と私は、見えなくなるまで手を振り続けました。

私が雨を好きになった、とある日のお話です。

北杜市立甲陵中学校 三年

藤井 釉菜

絵 子大人 (cottona)